

〔研究ノート〕

大和文華館所蔵

白磁蟠龍博山炉と類品をめぐって

香炉は香をたくための器で、『岩波仏教辞典』を引くと「三具足の一。香を薫するための供養具で、<居香炉><柄香炉><釣香炉>の3種がある。居香炉のうち、博山炉は仏教以前に中国で行われていたもので、山岳形の蓋から香煙が立ちのぼる式の仙岳思想に基づくもの。」(抜粋)とあります。漢時代の金銀象嵌銅製博山炉(図1)では、脚部を除く香炉全体が険しい山岳を象り、その中に仙人や動物が配され、山の下部には金象嵌による雲気文や龍が見られます。「博山炉」は漢時代に盛んに造られており、通常、山岳を象る香炉を指し、北宋時代の呂大臨『考古図』には、博山炉は承盤に湯を貯めて気を潤し、香を蒸し、太子の服に(香をたきしめるために)用いた、と記されています。

大和文華館所蔵品の中には金銅(漢時代)や緑釉陶(後漢時代)・白磁(隋～初唐)と材質の異なる博山炉があります。その中でも白磁蟠龍博山炉(図2、本紙表紙に全図、以下「文華館所蔵品」)は白い素地に透明釉を掛けて高火度焼成した白磁の早期に属する名品の一つとして、広く知られています。

蓮華を象った香炉には二匹の蟠龍が巻き、最下部に承盤を伴います。蓮華の上は蓋となり、その内部には穴が三ヶ所開けられています。香を焚くと、山形に貼り付けられた火炎宝珠文の間から香煙が漂う優雅な趣向を凝らしています。

文華館所蔵品の造形は漢時代の博山炉(図1)の造形とは異なり、香炉上部の山岳部分は火炎宝珠文が連ねられ、下部は蓮華形に象

られ、その中に仙人や動物は認められません。その代わりに、蓮華の茎には二匹の尾の細い蟠龍が巻き付いています。これは、中国に仏教が伝来し、浸透するとともに須弥山のイメージが仙岳と重なり、蓮華や龍、宝珠などの造形が博山炉に入り込んだためと考えられています。

確かに、六朝時代の石仏で仏前にあらわされた博山炉には下部が蓮華で象られたものが多く見られ(図3)、このような文様は北魏から隋にかけての海柎榴華文の展開の中で解釈されています(中野徹「中国の文様—その由来と流れ」p.201-202「展開写真による中国の文様」平凡社、1985年)。同じく海柎榴華文の展開の中で見られる蓮弁上に火炎宝珠を配した文様はHonolulu Academy of Arts所蔵の白磁博山炉の山形の蓋に貼り付けられており、陶磁器や金属器による博山炉の造形は蓮華やパルメット、柘榴など植物文様の中に入り、また博山炉の装飾に用いられるといった相互に関連し、展開している様子が窺えます。また、雲崗石窟第10洞前室北壁門口(北魏時代)には、須弥山が二匹の龍が幾重にも巻き付いた険しい山岳としてあらわされます。文華館所蔵品は、このような仏教に結びつく龍や蓮華のイメージをより強く反映し、生命力あふれる姿で表現されています。

文華館所蔵品と形状が同様な隋～初唐時代とされる博山炉は、白磁のほか緑釉(図4)があり、ほぼ同形の燭台も認められます。先日、フランス国立ギメ東洋美術館の白磁を集めたコーナーで、一点の白

磁が目につきました。これは大和文華館所蔵の白磁蟠龍博山炉の蓋を取った姿に近似し、ただし、蓮華の中に円筒があることから燭台とわかります(図5、以下、「ギメ美所蔵品」)。その他の形状はほぼ同じで、蓮華の茎には二匹の蟠龍が巻き付き、それぞれ片腕を挙げて蓮華を支え、下部に承盤が付随しています。異なる部分は、蟠龍が足元の蓮弁が付いた台に乗っていることで、足は台上に納まっています。また各所の造りにも相異が認められます。ギメ美所蔵品より近い類品には、実見していませんが、ボストン美術館蔵品があります(『東洋陶磁大観』第11巻、講談社、1978年、図版17)。両者の相異を挙げると、文華館所蔵品の蓮弁がなだらかな曲線であらわされているのに対して、ギメ美所蔵品では蓮弁の中心線が稜線となり、蓮弁の下から先端にかけての湾曲がより強くなっています。また蓮茎が長く、蟠龍の頭部が小さいために、全体的に良くまとまっています。それに対して文華館所蔵品では龍の頭部が全体と較べて大きく、蓮弁や蟠龍の身体に緩やかな曲線が用いられ、豊かで大らかな気風を備えています。

胎土や釉の状態も異なります。文華館所蔵品の胎土が純白に近いもののわずかに乳白色の温かな色みを有し、僅かに暗緑色を帯びた透明の釉薬がかかっているのに対し、ガラス越しの観照ですが、ギメ美所蔵品の胎土はきめ細かく、白色の純度も非常に高く、その上に僅かにくすんだ青緑色を帯びた透明度の高い釉薬が均一に掛けられ、釉内には細かい貫入が認められました。文華館所蔵品の釉薬の厚さは部分によりムラがあり、各所で釉が流れています。ギメ美所蔵品は蓮華の裏面まで均一に釉薬が掛けられ、表面には艶やかな光沢があります。二点の作品は形状が近似するものの、

細部の造作や胎土・釉薬の調子において相異が認められました。これらの相異から、窯や製作年代の推定が今後の課題とされます。

近年、河南省鞏義市の黄冶窯や白河窯の発掘とともに唐時代の三彩と白磁に関する考古学的研究が進められており、早期の白磁に関する資料も増えてきています。2008年に大和文華館に来館した河南省文物考古研究所の孫新民所長が白磁蟠龍博山炉を御覧になり、孫所長が発掘に携わった河南省鞏義市白河窯出土品の白磁片に文華館所蔵品に良く似た蓋が出土していることを教えていただきました(図6)。写真を見ると、蓋の約半分が欠けているために構造が良く分かりません。蓋の上方に穴が三ヶ所開けられており、表面には火炎宝珠文様を型抜きした粘土片が貼り付けられています。火炎宝珠文様は大和文華館所蔵品にも見られる連珠文を伴う形で、さらに複雑・豪華なその形は前掲の出光美術館所蔵の緑釉博山炉に最も近いと見られます(図4)。図録によると、白河窯は北魏と唐時代の窯を代表とし、前者の主たる生産品は白磁・青磁、後者は白磁で、唐三彩も大量に出土しているということです。造形技法や胎土、釉薬の比較が更に必要ですが、六朝～唐時代にかけての製陶が明らかになるにつれて、白磁蟠龍博山炉・燭台の生産地及び年代が定まる可能性が見えてきたといえます。

(図1は『世界美術大全集』東洋編第2巻、小学館、1998年、図3は大阪市立美術館編『六朝の美術』平凡社、1976年、図4は根津美術館『唐磁』大塚工藝社、1988年、図6は『鞏義白河窯考古新発見』大象出版社、2009年より転載させていただきます。 瀧朝子)

図1 前113年頃
河北省博物館所蔵品

図2 大和文華館所蔵品(炉身・蓋)

図3 三尊仏坐像(部分)
西魏時代

図4 出光美術館所蔵品・部分



図5 ギメ東洋美術館所蔵品



図6 鞏義市白河窯出土品

